

## 基調講演②

主体性等評価にどう向き合うか  
～高校から大学への教育接続を意識して～

講師▶ 西郡 大（佐賀大学アドミッションセンター長・教授）



ご紹介にあずかりました、佐賀大学の西郡と申します。先ほどの白井さんからは非常に重厚なお話だったと思いますが、私からは「主体性等評価にどう向き合うか」について、現場的なところから見て、どのようなことが主体性評価に向き合うことになるのかを少しお話しさせていただきます。

（スライド2）最初に、かなりシンプルに、「なぜ、今、大学入試改革なのか」ということを簡単に整理したいと思います。皆さんもご存じのとおり、急激な社会変化うんぬんについては、先ほど背景の説明がありましたので省きますが、このような社会背景があります。その上で、しっかりと全体の中で入試改革を捉えていきたいと思いますということが言われています。その中で、先ほどもアクティブ・ラーニングの説明がありましたが、高校では「主体的・対話的で深い学び」が非常に重要だと言われております。

（スライド3）そのような背景があり、世の中が大きく変わることは自明なことでありま

す。このままにしておくのはまずいだろう、だから、今後を担う人材育成を考えていかなければいけないということで「教育改革」です。かなりシンプルな形でまとめると、このようなことではなかろうかと思えます。

（スライド4）では、どのような部分を改革するのですが、その1つのキーワードが、今日の重要なテーマである「主体性」に関わるのではないかと思います。これまで直面したことのない新たな課題や社会の中において新たな課題が出てくるだろうと思えます。新たな課題であるが故に、「決まった答えがない」のです。また、急速な変化、予測できない時代が来ると言われていますが、そのような時代に向けて対応できる準備ができています。さらに、世の中の流れが速ければ、身に付けた知識やスキル・技術も場合によっては陳腐化も早いことが考えられます。そうすると、学校で学ぶ知識だけでは対応できないでしょう。これからの社会を生きていく生徒たちが自ら問題点を見つけ、情報収集をしていく、そしてより良い解決策を模索する力が必要だと言われているのです。変化に対して受け身では対応が難しいだろうといった中で、出てきた言葉が「主体性」だと捉えています。

（スライド5）個人が主体性を持っていればいいのかというと、必ずしもそうではないでしょう。個人の主体性だけではどうしても限界があるのは、皆さまも経験的にお分かりだと思

ます。近年では「ダイバーシティ」という言葉もよく耳にしますが、そうして出てくるのが、多様な背景を持った人々と一緒に働いていくこと、協働していくことの必要性です。これが、これからの時代を生きる力と整理できるのではないかと思います。もちろん、この背景にはもっといろいろな考え方があると思います。先ほどからの繰り返しになりますが、シンプルに捉えれば、これらがポイントになるのではないかと思います。

(スライド6) その中で、入試が変わらないと高校教育が変わらないと、これまでも言われてきました。なぜそうなるかという、せっかく高校でいろいろと個別に工夫して、探究的に学んだとしても、入試で評価されないのであれば、入試で評価される部分を集中的にやったほうが合理的ではないかという考え方です。さらに「大学全入時代」と言われて久しいですが、数の上ではどこかの大学に入れるので、そんなに勉強しなくても大学に行けるんだっらいいかと、従来に比べて動機付けの部分が不十分な状態であります。そうすると、大学としても、大学の教育の質的向上を図りたいが、入ってくる学生が、本来、高校卒業までに付けておいてほしい基礎的な力、基礎学力中心とした力が付いていないので、質的向上を図れないということになります。従って、高校教育、大学教育、そして大学入試をセットで改革しようということが高大接続改革の捉え方のポイントではないかと思います。

(スライド7) これまでの大学入試の捉え方を整理します。多くの場合、大学は一斉型の講義が中心であったと思います。教える側が教壇に立って、多くの学生がいます。一斉講義を行いますと、知識や技能のばらつきが小さいほうが都合がいいのです。極端な話、四則演算しかできない学生から高度な微分積分までできる学生がいた際に、レベルの高い低いは別にして、ばらつきが大きくないほうが一斉型の講義を

やりやすいのです。当然、そのような学生を取ろうとする場合、入試において何が一番ふさわしいかという、ペーパー試験を中心にした学力検査です。それにより、ある程度の知識・技能を持っている人たちを選抜することがなされてきました。当然、そのような入試が実施されれば、高等学校においても知識・技能をしっかりと身に付けさせましようが一斉授業が中心に行われてきたのだと思います。この構造で捉えれば、おそらく最も合理的な入試のあり方は、ペーパー試験を中心とする入試であったと思います。これが、従来入試の捉え方ではないでしょうか。

(スライド8) しかし、今、大学も高校も、さまざまな教育改革が行われております。アクティブ・ラーニングは大学においても導入が進み、大学自体が担う役割もかなり変化してきています。一方で、各高校においても、探究型の学習やオールイングリッシュ、ICT活用の教育など、さまざまな学習活動が積極的に導入されています。まさに学びの変化が起こっていると考えますと、学び方が変われば、学生の選び方も再考する。今やっている入試が本当にふさわしいかを一度考える必要があるのではないかと、ということが高大接続を考えるために重要ではないかと思います。

(スライド9) 2021年度の入試です。今の高校2年生が受験する入試ですが、予告では「学力の3要素」を多面的・総合的に評価するものへと改善することがうたわれています。さらに、高大接続システム改革会議においても、大学入学者選抜によって「学力の3要素」の育成に向け、高等学校における指導のあり方の本質的な改善を促していきたいという背景があります。高大接続答申においては、接続段階の評価のあり方が変われば、入試を「梃子」にして、高等学校と大学の教育改革のあり方を転換していきたいということがあります。とにかく入試という存在を通じて、高校教育と大学教育に、し

っかり改革につながるようなものを期待していることが見えます。

(スライド 10) 大学という立場から考えますと、これまで自分たちが実施してきた入試は「学力の3要素」を評価できていなかったから、自ら改善すべき課題であると認識しているとは限りません。つまり、それぞれの大学の問題意識から、自然発生的に「学力の3要素」の評価を実施しなければいけないという認識に至ったわけではないので、おそらく多くの大学は、どう評価すれば何が解決するのかと、かなり頭を悩ませているのではないかと思います。高校の先生方にとっては、各大学がどう考えているのかを早く出してくれという気持ちだと思いますが、大学においても、おそらく高大接続改革が始まった当初は、いろいろと悩まれたのではないかと思います。



(スライド 11) 今日、私の話す立場としては「主体性等評価」であります。私個人としては主体性を評価するのは非常に難しいと思います。主体性を評価すべきかしないべきかという議論ではなく、するという前提に立ったときに、どのように制度に落としていけば現実的な制度になっていくのかを中心に考えていきたいと思っています。

では、「主体性評価」へのアプローチとして、今回は一般入試、今後は「一般選抜」と呼ばれますが、そこにおける評価に注目してお話をさせていただきます。

(スライド 12) 入試において評価が難しい「学力の3要素」は何かというと、思考力・判断力も非常に難しい面がありますが、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価することが評価の技術面から考えると一番難しいと思います。

(スライド 13) 今日は行いませんが、普段、このような話をする際、会場の皆さんに幾つか例を出し、「この例について、主体的だと思いますか」「順位を付けてください」とお聞きするのですが、毎回、皆さんが手を挙げるところはばらばらで、順位を聞いてもほとんど一致しません。つまり、捉える人によって「主体性」の認識が多様であることが前提になってしまいます。特に評価するとなると、当然、評価をする人、評価をする分野や背景によって「主体性」の捉え方は全く異なるものです。また、定義して捉えることが難しい主体性について、さらにその「程度」で比較します。評価して順位を付けることは、1つの物差しに乗せなければいけませんので、「程度」を比較することは非常に難しいところがあります。しかし、評価が求められている中で、どのようなものが高校、大学にとって現実的な制度となりうるのか、私としては問題意識を持っていました。

(スライド 14) 「主体性」について、多様な捉え方がありますが、少なくとも入試や教育場面において、この「主体性」という言葉を使ったら、やはり「学び」につながるものではないかと思っています。「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」に関するものを前提にお話を進めていきます。

(スライド 15) この「主体性」について、どのような生徒たちや受験生を想定するのかです。正規分布の中で、偏差値を示した下の数値は、50を中心に最大のボリュームゾーンです。トップ層などの主体性は対象としません。多くの子どもたちに当てはまる学力層として想定し考えてみたいと思います。

(スライド 16) 一般入試を対象に主体性等評価を考えたいと申しましたが、完全な妥当性を持った評価ができるかは別にして、主体性や資質・適性を評価しようとする、これまでの A0 入試や推薦入試で蓄積されたノウハウがありますので、受験者に関する多くの材料を基に、ある程度の時間をかけて丁寧に評価すれば、そこまで問題とはなりません。しかし、一般選抜において主体性を評価するとなると、非常に難しい問題があります。最初に挙げられるのは、国立・私立に関わらず、評価期間が十分確保できないことです。一般入試は 2 月以降に始まり、早く合格発表を出さなければいけないので、評価期間が十分確保できません。大学によっても、分野・学部によってもさまざまかもしれませんが、一般的に受験者数は非常に多くなるので、主体的な学びを評価する方法として面接試験や集団討論を行うのは難しいのです。その中で現実的な 1 つの手段として考えられるのは、書類審査でしょう。その書類審査にフォーカスを当てたいと思います。

(スライド 17) 「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直し」では、さまざまな見直しが行われましたが、「一般入試の改善」として「主体性等評価のため、調査書や志願者本人が記載する資料等の積極的活用を促す」です。この予告の「促す」という表現を、大学はどう捉えて制度に入れていくことになるかだと思います。

(スライド 18) 「主体性」の評価として、大学はどんなことを知りたいのか。さまざまな分野、学部で考え方が異なるかもしれませんが、共通して言えることは、入学後に主体的に学びを深める姿勢を示すことができることを確認したいのです。その方法を考えてみますと、受験生のこれまでの行動や姿勢を見るのか、あるいは、来てもらって実際のパフォーマンスを見るのかとなりますが、今日は書類審査に注目しますので、これまでの行動や姿勢を、書類を通

じて評価することを考えてみたいと思います。

(スライド 19) 大学として知りたいことは、入学後に主体的に学べる可能性や根拠を示してほしい、高校時代にどのように学びを深めてきたのかを知りたい、または、それらによって高校時代にどんな変化があり、どんな結果が生じたのかを教えてください、実際に行った具体的な行動事実とその成果や過去の行動から探究力はどれくらいあるか推測したいので情報が欲しいなど、いろいろあると思います。主体性はそのようなことを通じて間接的に評価するしかありません。

その中で、評価のアプローチとして大きく 2 つに分けられるのではないのでしょうか。まずは、客観的に評価することを考えますと、多くの人が目に見える成果や実績に注目した評価が 1 つのアプローチです。つまり、主体性を持っている生徒たちであれば、当然、主体性を持っている故にしっかりと行動に移すことができるでしょう。行動に移すことができれば、目に見える結果として成果や実績につながります。生徒会長をやる、スポーツで優勝する、グループで何かに取り組んで賞をもらうなどが考えられます。そうした成績や実績を見ることによって、主体的な成果だと考えよう、ランク付けとして評価しようという考え方がありますが、やはり課題があります。これが本当に主体性と言い切れるのか疑問があります。例えば、リーダーをじゃんけんで決める、または輪番制など、いろいろな形でリーダーを決めることがあります。生徒会長だったら分かりやすいですが、評価されるために形だけの役職が増える可能性があることは課題としても挙げられます。

(スライド 20) 成果や実績ではなく、学びや活動の「プロセス」に注目した評価をすればいいのではないかとされます。例えば、「どのように学んだのか」「学びの中で何か課題にぶつかったときにどう克服してきたのか」を評価する 1 つのツールとして「ポートフォリオ」が

注目されています。ただ、この学びや活動の「プロセス」を評価するといっても、なかなか簡単ではありません。当然、ポートフォリオを使おうとしても、個人によって作った文脈や背景が異なりますし、大学が今までこのような評価をしたことがありませんので、ポートフォリオを評価するための評価基準を新たに作らなければいけません。さらに、評価に多くの時間がかかります。これを一般入試で行うと、非常に難しい現実的な課題があるのです。

(スライド21) そうした中で、どのような形で書類審査を行う際の観点を決めていくのかを考えてみたいと思います。いろいろなやり方がありますが、代表的なやり方としてご紹介したいと思います。「主体性」や「協調性」といった目に見えないものを評価しようとした場合、基準に落とすには複数の人で議論をする必要があります。そうすると、目に見える形で、われわれが考えている評価したい「主体性」がある場合、どんな行動を取るだろうかと、行動を洗い出していくのです。「協調性を持っている人たちはこんな行動を取るだろう」「そういった行動を通じて、こういった資質があるとするれば、どんな行動を取るだろうか」と考えることによって評価基準に落としていきます。例えば「～の場合は、〇〇をしている」といったことです。そのようなことをしっかりと整理した上で評価基準に落としていくことが代表的な例だと思います。

(スライド22) このような作業を評価の「構造化(ルール化)」といい、総合的・感覚的に評価するのではなく、構造的に評価を考えていきます。例えば、「主体性」が「自ら明確な意思を持ち、積極的に行動しようとする姿勢」であるとすると、5段階評価の場合、1に該当するのは「周囲に依存しており、物事に対する当事者意識が希薄である」、5は「明確な意思を持ち、当事者意識が高く行動している」です。これは、下に引用がありますが、就職の採用試

験の代表的な例として挙げています。このように具体的な行動を基に評価基準に落としていきます。これを作るだけでも、いろいろな議論が必要だと思います。

(スライド23) このように目に見えないものを評価する際には、基本的に複数の目で評価することになります。その際に問題になってくるのは、信頼性や評価の一致率です。これに関して、ある研究があります。ある大学のA0入試での面接試験の場合です。複数の面接官が専門的な関心について、例えば、工学部の先生が工学分野の専門に関する問いについては、評価に関する信頼性が高くなります。一方で、一般的な意欲や態度をどう評価するかは、ある程度ルーブリックを作っても評価は割れてしまうことが報告されています。これを改善するためにどうすればいいのかということですが、1つの方法は、ルーブリックの構造化の強化です。評価基準をもっと構造化にして、ルールを決め、強化していけば、ぶれが少しずつ改善されていくのかもしれませんが、しかし、面接試験の場合を考えますと、せっかく面接試験を行っているので、受験生と対峙し、相互作用の中でいろいろなことを聞き評価しているのですが、厳格なルールの中に入れてしまいますと、完全に一定の枠組みに押し込めてしまいます。そうすると、面接試験である必要はない、質問紙で聞いたほうがいいのではないかとなくなってしまいます。

「信頼性」という評価のぶれを抑えようとするればするほどルールを決めなければいけません。「主体性」を評価しようとするればするほど、主体性が均一化していくことになってしまうという課題があります。

(スライド24) 「2つの採点のアプローチ」です。評価を決め構造化し、評価を行うやり方として、「分析的評価」があります。主体性にも、リーダーシップがあるなどのさまざまな評価観点があるとすると、しっかりと観点を決め、配点を振っていき、その積み上げで合計点を出

すことがなされます。こうすることによって、「信頼性」を高めることがある程度実現するのですが、やはり課題はあります。各観点を幾つ決めれば妥当なのかということや観点別に分けた得点を合計したとき全体の印象と一致しないこともあります。さらに、丁寧に行いますので、時間がかかります。一方で、「総合的評価」があります。観点を決めず、全体的な観点から見てどうなのかという評価です。比較的自由度が高く、詳細なルールが決められていませんので、細かい観点を評価者で共有できないといった課題があります。「分析的評価」は、時間がある A0 や推薦であれば、非常に有効かと思いますが、一般入試において書類審査で行う場合は、「総合的評価」で評価することが現実的ではないかと私自身は考えています。

(スライド 25) なぜかと申しますと、仮に書類審査や調査書でも志願者本人が書くものでもいいのですが、活動や実績を中心に評価したい場合、このような評価は簡単だからです。例えば、3人の採点者がいて3人とも「この申請はいいね」のように、多くの人が高く評価できるものです。極端な話では、数学オリンピックといった顕著な実績のあるものは簡単に評価できます。一方で、3名の評価者が「これは駄目だな」「これは評価できない」という内容についても簡単に評価できます。例えば、400字で書いてくださいというのに10文字程度しか書いていない場合、「この子を受け入れると、入学後、大変だろうな」などです。そのため、「A」と「C」は識別が非常に簡単です。一方で、最も多くの受験者が該当するであろう「評価」に差を付けにくい内容です。ここが非常に難しいのです。明確な根拠や理由をもって点数化するのが難しいことを考えますと、せいぜいスタンダードの基準を置いておき、「ややプラス」または「ややマイナス」という4段階か5段階の評価が現実的という考え方になるかと思えます。細かく観点を決め、「B」に差を付

けようとしても、場合によっては、積み上げた点数が妥当なのかという課題が残りますので、総合評価の中で4段階か5段階が現実的なのかと思います。

(スライド 26) 評価の技術的なところを見てきましたが、一方で入試がもたらす影響力も考えておく必要があります。多くの大学で「主体的な活動や実績を評価します」と言った場合、当然、入試で評価されるとなると、生徒たちも高校での活動をしっかりと頑張ろうとし、活動が活性化します。活性化した上で、入試のときに自分が頑張ったことをアピールしよう、申請しようと考えます。これは非常に健全な動機付けだと思います。しかし、現実的には、受験生にとっては自分が行きたい大学に合格したいので、何が入試に有利なのか、別に興味はないが入試に有利な活動や資格を優先的にやろうとなってきます。さらに、熱心な先生が「そんな活動実績じゃ、『主体的』だと評価してくれないぞ」という指導があるかもしれません。こうなると、主体性評価があることによって高校教育に過度な動機付けが働いてしまいます。逆に、生徒たちの主体性を損なうリスクがありますので、過度な動機付けになるよりも適度な動機付けを考えていかなければいけないと思います。

(スライド 27) その中で私なりに行き着いた一般入試の現実的な制度設計です。主体性が大事なのは多くの人が共通的に思うところですが、それを評価するとなると技術的に難しいのです。評価技術として安定している手法である学力検査を前提とし、しっかりと入学者に求めること、入学に不可欠な能力やスキルをまずはしっかりと評価しておくことが必要です。その上で、主体性評価が受験生にとって適度な動機付けとして機能することを目指すこと、あるいは位置付けることが重要ではないかと思えます。つまり、受験生自身の努力が直接的に反映されやすく、何をどれだけ頑張ればしっかりと

したものになっていくのかを理解しやすくすることが重要です。その意味で、ペーパー試験は、教科書をしっかり解けるようになるのと得点として表れやすいように努力の方向性を示しやすい重要な土台になるのではないかと思います。一方で「頑張っただけで主体性を伸ばさない」と言っても、努力の方向性が分かりませんので、そのようなものに重点を置くよりも、出願の際に、一度、高校時代の取り組みを「振り返る」という機会として、主体性評価を位置付けてはどうかという考えに至りました。

(スライド28) そのようなことを踏まえて、実際に私が所属している佐賀大学において主体性評価を先行して行っていますので、具体例を紹介したいと思います。

(スライド29) まずは、佐賀大学だけではなく、他大学の事例として、インターネット上に公表されているものを下に並べています。筑波大学、徳島大学、長崎大学、昭和女子大学です。全員を評価するところもあり、ボーダー層を評価したり、調査を使ったり、さまざまな形で実施していますが、多くは書類審査であります。長崎大学は、ペーパーインタビューという手法も使っていて、各大学でこのように行っているようです。

(スライド30) 佐賀大学は、6学部、学生数は約6,000名です。今日は、理工学部と農学部で先行して実施した例を話したいと思います。

(スライド31) ちなみに、佐賀大学におきましては、一部で思考力を見るためにタブレットを使った入試や、県内の高校生を対象とした3年間を通じて育成するプログラムをセットで、高大接続改革として実施しています。今日は、主体性に関する部分を評価する「特色加点」について紹介します。

(スライド32) 現在、6学部あると申しましたが、2021年度入試に向けてこのような予告をしています。医学部につきましては、従来から面接試験や調査書を用いて既に行っていま

す。理工学部と農学部につきましては、2年前倒しで、この前の入試から先行実施していますのでご紹介したいと思います。

(スライド33) この「特色加点制度」は何かと言いますと、センター試験と個別学力検査とは別に加点形式で評価する書類審査です。申請書の提出は受験生の任意ですので、出さなくても構いません。どんなことを書かせるかと言いますと、高校時代に取組んだものを中心に書いてもらいますが、活動実績だけではなく、自分が申請する実績・活動を通して身に付けた能力・スキルや経験が、入学後にどう活かせるかを書いてくださいというものです。理工学部は、当初配点が1,500点あるうち最大加点が30点です。後期が1,000点のうち最大加点が30点です。農学部は50点、50点になります。これは最大加点数です。あえて配点を出すことによって、意識してもらおうことを狙いとしています。

(スライド34) この評価ですが、「合格ボーダー層」に注目して行っています。左が学力検査の合計点で、低いものから高いものへと並んでいます。これまでに学力検査の合否判定資料を見たことがある先生方はよくご存じだと思いますが、合格・不合格は1点差や0.1点差で合否が分かれています。この数点差で合否が分かれている層において、本当に学力的な順位性があるかということと必ずしもそうではありません。それを考えれば、「違った要素を加味して評価してはどうか」、つまり、「学部が求めている学生像に少しでも近い人を受け入れたいので、『特色加点制度』で評価しよう」というお話です。

(スライド35) 実は、ボーダー層に焦点を当てなくても、実際の合計点評価も同じことです。総合点で選考した場合を考えてみたいと思います。共通テストと個別学力検査は500点、450点と配点があり、そこに書類審査50点を足したとします。つまり、書類審査によってどれくらいの合否が入れ替わるのか、これを合否入れ

替わり率と言いますが、結果的に50点が足されて全員を評価し、得点順に並べてみたとしても、ボーダー層のみが影響を受けるのです。上の層に関しては、書類審査が0点だったとしても「合格」という結果は変わりません。一方で、下の層に関しては、評価した場合に満点だったとしても「不合格」という結果は変わりません。つまり、全員に対して採点を行ったとしても影響を受けるのは、結局、ボーダー層のみになります。それであれば、最初に上と下の層を除き、ボーダー層だけを丁寧にみてあげようと考えました。

(スライド36) 下のほうが、書類審査を出して採点したとしても合格水準に達しない層です。それより上は、採点した場合、ひよっとすると変わるかもしれない、合格できるかもしれない層です。一方で、一番上の層は、採点した結果、0点だったとしても合格は変わらないので、最初に下と一番上の層を除いてあげます。真ん中の層だけを2次選考で丁寧に評価してあげて、一次選考との合計点で評価します。一番上の層の子たちは、2次試験免除という扱いにします。結果的に、最終合格者が決まります。評価対象者を限定することによって丁寧な評価を実現することになります。

(スライド37) ボーダー層評価ですが、2つ考え方があります。任意のボーダーを設定して、90%で切ろうなど順位に注目して行うボーダー層評価と、私たちが考えている得点に注目するボーダー層評価があります。②は、全員評価した場合に影響が出ない層を外すのですが、①の場合は、全員評価したら、ひよっとすると合否の入れ替わりが起こるかもしれないものになります。このように2つの考え方があります。

(スライド38~39) 制度について、どのように評価していくのかです。理工学部と農学部は理系の分野ですので、当然のことながら、生徒が出願する志望分野は、理系の分野と関係のある部活動や実績もあれば、全く関係のない実績

もあります。活動実績や成果自体が非常にインパクトを持っていけば、それ自体を評価することもあります。多くの場合は普通の高校生活の中で行われてきたものになります。そうすると、結果やプロセス、アドミッション・ポリシーとの整合性を定性的に評価することになります。志望分野と関係ない活動実績に関しては、例えば、野球を頑張っていたとします。「野球のバッティング技術が理工学部に入って活かれます」と申請されても評価のしようがありません。「3年間、練習に取り組んで、自分には継続性があります。その継続性を活かして、しっかりと研究活動に取り組んでいきたい」あるいは「自分は練習メニューをしっかりと考えて、それによって試合に勝てるようになった企画力があります」というアピールの方が適切です。佐賀大学の場合は、問題解決型学習やチームワーク型学習を行いますと言っていますので、それらをしっかり理解した上で申請してもらいます。その根拠資料として、練習日誌や練習メニューなど、いろいろなものが考えられるので、何かの賞状や新聞記事だけがエビデンスというわけではないと思っています。

最初は、実績や活動を挙げ、専門分野と関係するもの、関係しないものを、世界、全国、ブロックで活動実績だけに注目し、客観的に評価すればいいと考え、高校生の調査書に書かれている活動実績をこの枠に当てはめていったのですが、明確な根拠を持って当てはめることは無理でした。つまり、活動をランク付けしたり、範囲を限定せずに評価することは難しいのです。そのような中で、どう評価するかというと、この2つの観点から、評価者が総合的に、あるいは定性的に評価していくことになります。

(スライド40) さらに、主体性を直接的に評価することにわれわれはあまりこだわっていません。先ほどの繰り返しになるかもしれませんが「とにかく、入学後、何を活かせるか書いてください」と言っています。申請する際に、

出そうとする人は、自分の高校時代に頑張ってきたことを振り返る機会があるのです。そうすると、自分がやってきたことを効果的にしっかりと申請するためには、何が求められているのか、あるいはどんなことを勉強するのかを知っていければ効果的なアピールはできません。つまり、申請前に、高校までの自分と大学から求められていることを擦り合わせてほしいということです。これが重要だと思っています。なぜ、これを期待しているかという、佐賀大学の事情があります。最初は上位校を目指していたけれど、センター試験で得点が取れず、先生に「佐賀大学を受けなさい」と指導される生徒は少なくありません。中には「こんなことを勉強するために来たわけじゃない」という生徒もいます。彼らを一人でも減らせれば、そこにかかる大学教員の教育的コストが減らせて効果的ではないかと思っています。



(スライド 41) われわれは志願者本人に書かせていますが、「出願前に書かせるから、受験生にとって負担だよ。志願者が減るんじゃないの」とよく言われます。われわれもそれは懸念していました。その代替措置として何を使うかという、「調査書」です。調査書を直接評価してもいいですかということをわれわれは非常に懸念しています。

(スライド 42) 右が調査書の現在の様式ですが、今後、入力するところがさらに増えてきます。これは、高校の先生方もご存じのとおり

だと思っています。

(スライド 43) 調査書を直接的に評価し加点する制度を考えた場合です。5月頃に成績開示があり、それを見た受験生は「自分は、調査書の点数が悪くて落ちているんだ」と思います。そうすると、誰しもそうですが、自分が書いたものや自分がチャレンジしたものであれば、ある程度納得できるとしても、自分以外が書いた情報によって合否が決定されていると感じることで、納得性の問題として十分に考慮しなければいけないところがあります。また、調査書は、枚数制限がなくなります。そうすると、受験生の気持ちとしては、当然、「私の調査書を何枚書いてくれましたか?」「僕は、この活動についてアピールしたいんだけど、先生は書いてくれていますよね?」ということが考えられます。すると、高校の先生方の責任が飛躍的に増すと共に、過重な負担となることは間違いないです。そのようなことを考慮すると、受験生は減るかもしれないが、本人が書いたものの補助的な位置付けで調査書を評価しようとしています。

(スライド 44) ただボーダー層を評価するだけでは、一般入試では時間的な難しさがあります。そこで、「評価支援システム」を新たに導入しました。インターネット出願が、今どんどん導入されていますが、出願情報や志望学科だけではなく、志望理由や活動実績も受験生に入力してもらいます。入ってきた情報を系統的にうまくコントロールし、大学の教員がこれを見て評価します。コピーや受験番号のナンバリングなどの事務作業が不要になって、評価者にとってもソートをかけたり、「2」と付けた受験生だけを抽出したりすることも可能です。また、いろいろなエビデンスを付けることが可能になってきます。

(スライド 45~46) 今、エビデンスという話をしましたが、おそらく多くの高校が高大接続改革という流れの中で、いろいろな資料をため

ているかもしれません。その情報蓄積の形の1つとして、「e-Portfolio」があると思いますが、e-Portfolio にデータを蓄積しているだけでは大学は評価できません。高校によって蓄積の仕方にも方法があるでしょうし、それをそのまま大学に出されたとしても評価するのはまず無理です。そうすると、評価に適したものに交換する必要があります。

(スライド 47) これが全てではありませんが、ショーケースという形で自分の学習成果について述べた上で、成果物を1枚の形でしっかりと整理します。これであれば、ある程度、評価に対応できる可能性があります。

(スライド 48~51) 実際の画面イメージです。受験生は、インターネット上から自分が申請するものを入力していき、根拠資料や参考資料など、いろいろなファイルを添付できます。これまで、紙で行っていた場合、2枚以内で出してください、など制限しなければいけませんでした。ポスター発表したものや論文も添付することができます。URL がありますので、自分のパフォーマンスを動画に撮って出したい場合は、動画共有サイトにリンクを張り付けることもできます。つまり、受験生にとっては情報の広がりが出てきます。そのほか、大学が設定したい記述事項を設定できます。

(スライド 52) 評価者から見た画面イメージです。パソコン上で、書類やエビデンスを見ていきます。この裏に採点表があり、段階評価をする際に、コメントやルーブリックと一緒に確認しながら点数を入れていきます。つまり、書類審査の紙で行ってきたことをシステムで行います。ただ、どこまで点数化できるかという、先ほどの考え方になるのではないかと思います。そのような形で評価をしています。

(スライド 53) 実際に特色加点制度を行ってみてどうだったかという、申請内容の大半は一般的な高校生活の活動実績でした。どのような人たちの合否が入れ替わったのかという、

申請内容の得点が悪かった人ではなく、未申請者、つまり出さない場合は0点と扱いますので、そこが入れ替わっています。さらに、大学が求めていることを完全に無視している申請も一定数ありました。推薦でしたら、高校の先生方からしっかりチェックが入っていると思いますが、そこまで手が回らないのだと思います。400文字程度の指定に対して10文字程度「入学後、頑張ります」といったものや、アドミッション・ポリシーを全く見ずに「自分はサッカー部だったので、入学後サッカー部に入って頑張ります」というものです。これらは大学が求めていることではありません。多様なエビデンスがありましたが、添付なしも一定数ありました。丁寧に評価を実施したけれども、適度な時間で終了しています。

(スライド 54) 実際に結果としてどうだったかという、両学部で導入しているのですが、志願倍率自体は前年度と比べて落ちませんでした。むしろ、上がりました。申請した人の割合は、前期日程と後期日程で比べると、第1志望が多い前期が高くなります。一番多いところで6割ぐらいでした。当初、7割ぐらい申請するのかなと思いましたが、そこまでは届きませんでしたというのが初年度の感想です。今回の申請内容の内訳では、多くが部活動です。これらを外してしまうと、受験者は出しにくくなってしまわないかと思います。また、研究活動やボランティア、資格検定といったものが次に多くなっています。

(スライド 55) 現時点で、できる範囲で検証をしました。申請書を出した人と出さなかった人の比較です。申請するということは、少なくとも出願前に面倒くさい作業をしなければいけません。入学者に対して、アンケートにおいて申請者と未申請者を比較しますと、「アドミッション・ポリシーに対する理解」は申請した人のほうが高いです。「志望分野で学べることの満足度」も申請者のほうが高いです。ただし、

「入学後の学びに対する理解」は同じくらいです。これは、大学の情報発信が悪いのか、あるいは知れば知るほどよく分からなくなったのかのどちらかだと思います。「自律性」や「他律性」などの尺度を作ってみました。自律性と「リーダー性」についても申請者のほうが高いです。さらに、皆さんの資料にはありませんが、辞退率も見ました。辞退率についても、申請者と未申請者を比べると申請者の方が低いです。つまり、活動実績の内容よりも申請するという行為自体に、ある意味、学びに向かう態度の一側面が反映されているのではないかと思います。確率の上では、申請する人を取った方が、学びに向かう態度を持っているかもしれないということですが、まだ1年のみの検証ですので、今後も引き続き見ていく必要があります。

(スライド 56)「成績開示」については、このような形で出しています。評価対象になった人たちはA B C Dで評価しています。基本的に一定の水準であればCになります。

(スライド 57) 最後となりますが、「高校現場に期待すること」です。

(スライド 58) これは個人的な考えであります。「主体性をどう育むか」です。生徒たちの主体性を育むとなると、いろいろな人たちに対して全体的な平均値を上げるようなイメージがありますが、簡単にできれば苦労はしないわけです。

(スライド 59) どのようなアプローチが考えられるかという、先生が生徒になぜ主体性が大事かを論理的にしっかり説明する。あるいは、興味・関心の喚起によって主体的な学習につなげる。出前講義などを通じてかもしれません。また、主体性を発揮しなければならない環境に置いてあげたり、ただひたすら待ったりするという方法があります。このような方法は、おそらく今に始まったことではなく、さまざまな取り組みやノウハウが既に蓄積されている

と思います。ただ、全てに効果的なものがあるわけではなく、場面によって違ってくるのではないかと思います。

(スライド 60) 主体性をどのように考えていくべきかです。仮に、主体性のレベルを低いものから高いものに並べることができたとすると、既に主体性が高い人たちは、このようにやりなさいという過度な支援は、逆に主体性を損なう危険性があります。むしろ、そのような指導よりも、主体性を発揮できる機会や経験の提供が重要だと思います。一方で、問題は、全て指示待ち、自ら考えようとしなさい、考えていない、具体的な想像になかなかつながらない、「できない」「ムリ」という回答が多い人たちです。大学生についても同じことが言えますが、こちらが意外と大きい集団です。重要なのはこちらのほうで、「主体性を育む」という意味について「受け身からの脱却」と捉えたほうがすくとんと落ちます。どれだけの生徒を脱却させるかが、非常に重要なのではないかと思います。少しでも脱却した子たちが大学に入ってくれば、学びを深められるのではないと思うのです。

(スライド 61) では、そのアプローチです。先生方が生徒に「今日から受け身の態度はやめるんだ」と指導したとします。けれども、言われた子たちは「受け身だと思っていません」「どのような態度が受け身じゃない姿なんですか」と思うかもしれません。生徒たちにそもそも受け身であるという自己認識はあるのか、どうすることが受け身ではない具体的な姿なのかと、多くの難しい課題があると思います。そうすると、直接的な指導よりも、「きっかけ」の提供が現実的だと考えます。

(スライド 62) その1つとして、「探究」というものがキーワードですが、これについては私から説明するまでもなく、今、非常に重要だと言われているところだと思います。

(スライド 63~64)「質の高い探究に向けて」です。高度化であることや自立的であることが

重要だと言われています。私は、このような概念的なところは専門ではないので深くは触れられませんが、個人的に、探究過程を高度化するための具体例として、SSHや探究型の学習を行っている高校へ行って審査員や講評をする際によく思うことがあります。高校でいろいろ行っていることがあると思いますが、例えば、調べ学習などで調べようとする、生徒たちはまずインターネットで調べようとします。引用の部分は、ほとんどインターネットです。それが少し高度になってくると、適切な文献や情報を調べます。それがもっと上がってくると、自分で調査や実験をします。そして、それを論文に書いたりプレゼンしたりすることが一般的に多くなされています。ここで出されたものが、人の意見、つまり、今まで行われていることと自分が新しく行ったことがごちゃごちゃになり、何が自分たちで探究したことかがよく見えていないようなものが多いように思います。探究を行っている先生たちはいつも意識されているところかもしれませんが、高度化する方向性の1つは、「人の意見と自分の意見を明確に区別すること」なのかなと思います。また、教科や科目と普段行っている授業がしっかりと結び付き始めると、これがどんどんうまくいき、高度化する上で非常に重要だと思います。



(スライド 65) 最後になりますが、「受け身からの脱却」を考えますと、生徒個人が自分の考えや行動を可視化することが1つのアプロ

ーチだと思います。つまり、「構造的に捉える習慣の定着」です。無意識にできている人は必要ありませんが、無意識にできない人たちにとっては、しっかりと可視化・言語化することが大事です。どんな目標を立てるのか、どんな計画を立てるのか、何をやるのかができないとなかなか改善しにくいものです。あるいは、先生たちも、具体的に褒めてあげることができません。目標や計画、行動などを言語化したり、これらに関する成果物を蓄積したり、一連のサイクルを習慣化することが考えられますが、これを生徒個人に求めるのは非常に酷です。そこで出てくるのが共同学習などで、生徒同士でうまく行わせることなどが必要です。また、本来の評価の意味での形成的評価や指導と評価の一体化という流れの中で位置付けていけると主体性の育成にもつながっていくのではないかと思います。

なぜ、これを最後に持ってきたかという、  
「大学入試のためにポートフォリオを作るのであれば、しないほうがいい」というのが私の考えだからです。しっかりと指導や学習に活かすための道具とするならば、ポートフォリオというものが非常に有効な手段となりますが、データだけをためるのであれば、別にポートフォリオでなく、パソコン上にためておけば十分です。そのような意味で、ポートフォリオが主体性評価とイコールにならないように、教育改善の1つとして位置付けたほうがいいのではないかと思います。

以上、長時間になりましたが、私の報告はこれで終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

スライド1

主体性等評価へどう向き合うか  
～高校から大学への教育接続を意識して～

西郡 大 (佐賀大学)



スライド2

今、なぜ大学入試改革なのか? ①

「**急激な社会変化の中でも、未来の創り手として必要な資質・能力を備え、自立し、社会に貢献する人材育成**」を目指す

- ・ 社会とのつながりを意識しながら学習の質を高め、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことが一層重要
- ・ 知識・技能と思考力・判断力・表現力をその双方ともに、バランスよく確実に育むことが必要

高大接続改革や学習指導要領改訂の狙い・趣旨を理解し、その全体の中で大学入試改革を捉える

急激な社会変化の中で必要な資質・能力は「**主体的・対話的で深い学び**」によって培われる

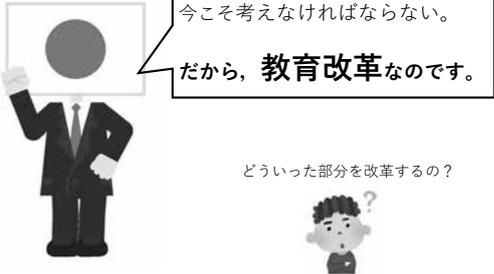
「新テストの実施等に向けた当センターの取組について」(大学入試センター)を参考に作成

スライド3

世の中が大きく変わることは自明。今のままでは、とてもまずい。これからの社会を担う人材育成を今こそ考えなければならない。

**だから、教育改革なのです。**

どういった部分を改革するの?



スライド4

重要なキーワードが「主体性」

1. これまで直面したことのない新たな課題の出現
2. 新たな課題であるがゆえに「決まった答え」がない
3. 急速な変化に対応できる準備ができていない
4. スキルの陳腐化も早い

↓

- 学校で学んだ知識だけでは対応できない。
- 自ら問題点を見つけ、情報を収集して考え、判断し、より良い解決策を模索する力

変化に対して受け身では対応できない

「人間の強み」を發揮すること  
「文章や情報を正確に読み解き対話する力」  
「科学的に思考・吟味し活用する力」  
「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」

**主体性**

スライド5

個人の主体性だけでは不十分

どんなに主体性を持っていても個人だけの頑張りでは限界がある。

+

**協働**

多様な人々

→

これからの時代を生きる**力**とされる



スライド6

なぜ大学入試改革なのか? ②

大学入試が変わらないと高校教育が変わらない

セットで改革しよう

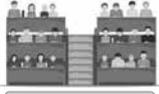
高校卒業までに必要な力が身に付いてないから、**大学教育の質的向上が図れない。**

- ・ 大学入学時点でどのような資質・能力が求められるのかを明確に示すことにより、高校教育の質的改善を図り、大学教育との接続を改善

「新テストの実施等に向けた当センターの取組について」(大学入試センター)を参考に作成

スライド7

### これまでの大学入試の捉え方

大学	入試	高校
 <p>一斉講義が中心</p> <p>知識・技能のパラつきが少ないほうが一斉講義は都合が良い</p>	 <p>学力検査中心</p> <p>一定の知識・技能を持っている人を選抜</p>	 <p>一斉授業が中心</p> <p>知識・技能の習得を中心とした大学入試対策</p>

これまでの学びのスタイルを考えると最も合理的な入試のあり方

スライド8

### 学び方が変われば、選び方も変わる！？

大学	学びの変化	高校
<p>各大学が担う役割の変化</p> <p>大学教育の質的転換</p> <p>新たな教育手法の導入</p> <p>求める学生像の変化</p>	<p>学び方が変われば、<b>選び方(入試)</b>も再考する必要がある</p>	<p>新しい学習活動が積極的に導入</p> <p>アクティブラーニング、探究型の学習活動</p> <p>オールイングリッシュ</p> <p>ICT活用教育</p>

高大接続改革の本丸である教育改革が進むことが、今回の入試改革の大前提

スライド9

### 2021年度入試の方針

最終報告を踏まえ、各大学の入学者選抜において、卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針を踏まえた入学者受入れの方針に基づき、**「学力の3要素」(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」)**を多面的・総合的に評価するものへと改善する。

「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」より抜粋

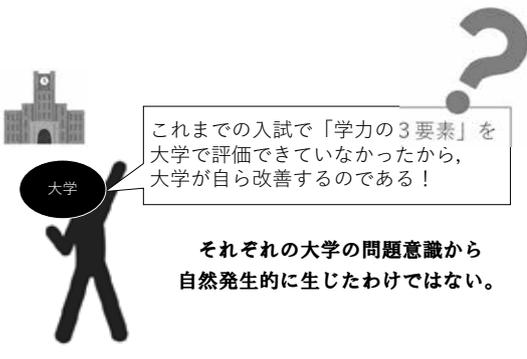
大学入学者選抜が、「**学力の3要素**」の育成に向けて、**高等学校における指導の在り方の本質的な改善を促し**、また、大学教育の質的転換を大きく加速し、高等学校教育・大学教育を通じた改革の好循環をもたらすものとなるよう、個別大学における入学者選抜の在り方、大学入学者選抜における共通テストの在り方の双方について改革を進めていかなければならない。

「高大接続システム改革会議『最終報告』」より抜粋



「接続段階での評価の在り方が変われば、それを梃子の一つとして、高等学校教育及び大学教育の在り方も大きく転換すると考えられる」(高大接続答申より)

スライド10



これまでの入試で「学力の3要素」を大学で評価できていなかったから、大学が自ら改善するのである！

それぞれの大学の問題意識から自然発生的に生じたわけではない。

スライド11

### 「主体性評価」へのアプローチ

～一般入試での評価に注目して～

スライド12

### 入試において評価が一番難しいのは？

- 知識・技能
- 思考力・判断力・表現力
- 主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度



スライド13

### 個人個人の主体性に対する認識は多様

- 評価する人、評価する分野、背景などの違いによって「主体性」の捉え方は異なるものと考えられる。
- 捉えることが難しい「主体性」について、さらにその程度を比較することは、もっと難しい。
- しかし、「学力の3要素」の1つとして、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価することが求められている。

どのように向き合うか？

- ・ 何を考えておく必要があるか
- ・ 理想を実現できるのか？
- ・ 現実的な問題は？
- ・ 妥協点を探る必要性 など



13

スライド14

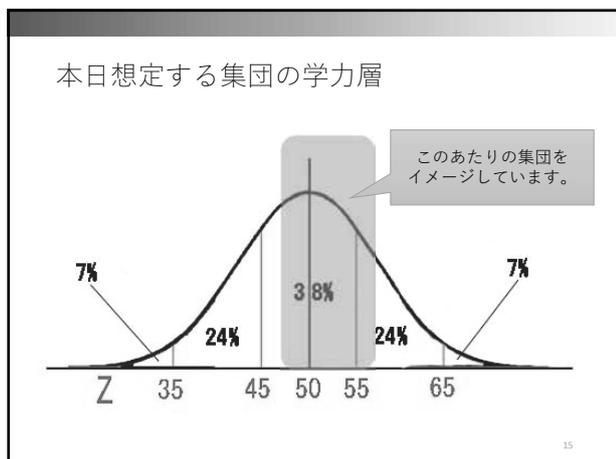
### 大学入試で問われる「主体性」

## 「自ら学びを深めようとする姿勢や行動」

に関するもの・・・？

14

スライド15



スライド16

### 一般入試における主体性等評価の課題

(主体性等に関わる資質や適性等を評価する場合)  
一定の時間をかけ、受験者に関する多くの材料をもとに丁寧に評価することが必要であり、短時間で判定することは難しい。

1. 評価期間が十分に確保できない
2. 受験者数の多さ



**書類審査** は現実的な方法の1つ

16

スライド17

### 平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告

- **選抜区分の見直し**
  - ・ 一般入試⇒「一般選抜」
  - ・ A O入試⇒「総合型選抜」(出願期間：9月以降、合格発表：11月以降)
  - ・ 推薦入試⇒「学校推薦型選抜」(出願期間：11月以降、合格発表：12月以降)
- **A O入試の改善**
  - ・ 「知識・技能の修得状況に過度に重点をおいた選抜とせず」の文言削除
  - ・ 活動報告書、大学入学希望理由書、学修計画書等を積極的に活用する
- **推薦入試の改善**
  - ・ 「原則として学力検査を免除し」の文言削除
  - ・ 学校長からの推薦書の中で、学力の3要素に関する評価を記載すること、及び大学が選抜に当たりこれらを活用することを必須化する
- **一般入試の改善**
  - ・ 主体性等評価のため、調査書や志願者本人が記載する資料等の積極的活用を促す
  - ・ 英語の試験を課す場合4技能を総合的に評価

http://www.mext.go.jp/component/a\_menu/education/micro\_detail/icsFiles/afieldfile/2018/11/06/1397731\_03.pdf

17

スライド18

### 主体性評価として知りたいこと

大学入学後に主体的に学びを深める行動や姿勢を示すことができることを確認したい。

これまでの行動や姿勢をみる

実際のパフォーマンスをみる

**【大学が知りたいこと(以下は例示)】**

- ・ 入学後に主体的に学べる可能性(根拠)を示してほしい。
- ・ どのように学びを深めてきたかを知りたい。また、それによってどのような変化や結果が生じたのか教えてほしい。
- ・ 実際に行った具体的な行動事実と、その成果は？
- ・ 過去の行動から、探究力がどれくらいあるかを推測しよう。

18

スライド 19

### 成果や実績に注目した評価

「主体性」 → 行動 → 成果や実績

主体的な成果だと考えよう

本当に主体的と言い切れるかは疑問

例) リーダーをジャンケンや輪番制で決めるなど

スライド 20

### 学びや活動のプロセスに注目した評価

学びや活動のプロセスを重視

ポートフォリオ

学びの過程を蓄積

- どのように学んだか
- どのように困難を克服したか など

- 個人によって文脈が異なる
- 評価基準を作りにくい
- 評価に時間がかかる

スライド 21

### 評価を行うための作業

この資質があるとすれば、どのような行動をとるだろうかを考える

主体性	協調性
<ul style="list-style-type: none"> <li>行動A</li> <li>行動B</li> <li>行動C</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行動X</li> <li>行動Y</li> <li>行動Z</li> </ul>

「~の場合、〇〇をしている」など、具体的な行動や様子を洗い出し。  
⇒ 評価基準作成のための材料となる

スライド 22

### 構造化（ルール）した評価

主体性 「自ら明確な意思を持ち、積極的に行動しようとする姿勢」

1	2	3	4	5
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 周囲に依存しており、物事に対する当事者意識が希薄である。</li> <li>• 周囲の状況に影響されることが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ある程度自らの考えで行動している。</li> <li>• 周囲の状況に流されることなく行動している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 明確な意思を持ち、当事者意識高く行動している。</li> <li>• 周囲に自分の考えを伝え巻き込んで行動している</li> </ul>		

具体的な行動をもとに評価基準を作成

スライド 23

### 信頼性の高い項目と低い項目の存在

ある大学のA0入試における面接者の信頼性係数（ルーブリック使用）

専門的な関心に関する項目	一定の信頼性係数
意欲・態度に関する項目	低い信頼性係数

木村拓也・吉村幸「大学入試研究ジャーナル」（2010）

そうであれば

（面接試験であれば）面接者によって個別に工夫される展開や評価の視点を一定の枠組みに押し込めてしまう。

質問紙の方が適していることになるかもしれない

ルーブリックの構造化の強化

スライド 24

### 2つの採点のアプローチ

分析的評価（構造化した評価）	総合的評価（自由度の高い評価）
<ul style="list-style-type: none"> <li>観点① 8点/10点</li> <li>観点② 4点/10点</li> <li>観点③ 23点/30点</li> </ul> <p>各観点の得点の合計点 <b>35点</b></p> <p>(欠点として考えられること)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 各観点の設定の困難さ</li> <li>● 全体の印象と一致しない</li> <li>● 時間がかかる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>観点① 7点/10点</li> </ul> <p>1つ観点の基準に沿って採点</p> <p>主体性</p> <p>(欠点として考えられること)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 詳細なルールが共有できない</li> <li>● 信頼性に疑問 など</li> </ul>

スライド 25

### どこまで点数化できるか

例えば、活動や実績等を中心に評価するとして

**A** 多くの人が高く評価する内容

**B** ややプラス評価 (+)  
評価に差をつけにくい内容

**C** ややマイナス評価 (-)  
多くの人が低く評価する内容

評価は比較的簡単

明確な根拠や理由をもって細かい点数化は困難

評価は比較的簡単

せいぜい4段階か5段階評価が現実的

スライド 26

### 入試がもたらす影響力

大学入試

主體的な活動実績を評価しますよ

健全な動機づけ  
素直にアピール

高校生活での活動が活性化

そんな活動や実績じゃ、「主體的」だと評価してくれないぞ

何が入試に有利なの？

入試に有利な活動や資格を優先的にやろう

過度な動機付け  
逆に主体性を損なうリスク

適度な動機付け

スライド 27

### 一般入試の現実的な制度設計

- 主体性を評価したくても、その評価は技術的に難しい。
- まず、評価技術として安定している手法（学力検査等）を用いて、入学者に求める不可欠な能力やスキル等を評価することが必要。
- 主体性評価は、受験生にとって「**適度な動機づけ**」として機能することを目指すことの方が重要ではないだろうか。

ただし、主体性評価をする場合の評価技術の信頼性・妥当性を高める努力は不可欠

受験生自身の「**努力**」が直接的に反映されやすい土台

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の評価（いわゆる「**基礎学力**」）

自らの高校時代の取組みを「振り返る」という機会

スライド 28

### 一般入試における主体性等評価の事例紹介

スライド 29

### 他大学の事例

- 筑波大学** <http://www.tsukuba.ac.jp/admission/undergrad/pdf/201903221400-1.pdf>
  - 調査書を用いた評価（総点のおおむね2%程度）
  - 5項目評価項目を指定
- 徳島大学** [https://www.tokushima-u.ac.jp/docs/2019021300035/files/20190219\\_yokoku3.pdf](https://www.tokushima-u.ac.jp/docs/2019021300035/files/20190219_yokoku3.pdf)
  - 調査書を用いた評価（配点の5%を上限）
  - 段階評価によるボーダー層評価
- 長崎大学** <http://www.nagasaki-u.ac.jp/nyugaku/admission/topics/pdf/R01/2021henkouten-yokoku3.pdf>
  - 調査書、面接もしくは面接に代わるペーパーインタビュー
  - 調査書の配点割合は10%以下。主観的記述分は採点対象外。
- 昭和女子大学** <https://exam.swu.ac.jp/university/recruitment/point>
  - 出願時の資料に基づき、独自の主体性得点を算出
  - 上位95%~105%のボーダーラインを対象に評価

スライド 30

### 佐賀大学について

教育学部	医学部
芸術学部	理学部
経済学部	農学部

学部生：6,108名

大学院生：1,025名

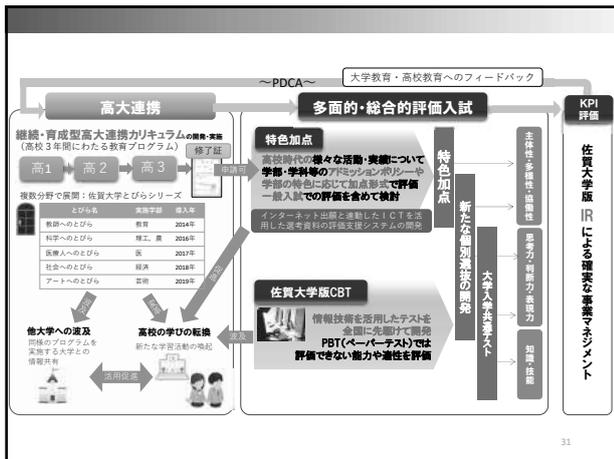
出身者

福岡	39%
長崎	11%
熊本	7%
鹿児島	2%
大分	3%
宮崎	3%
佐賀	26%
その他	9%

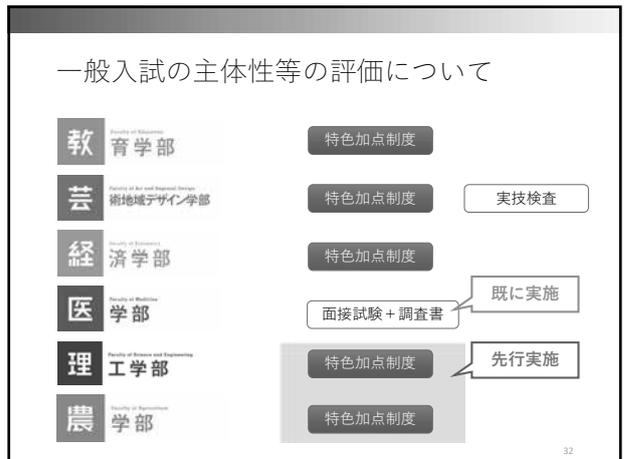
博多 35分

佐賀

スライド 31



スライド 32



スライド 33

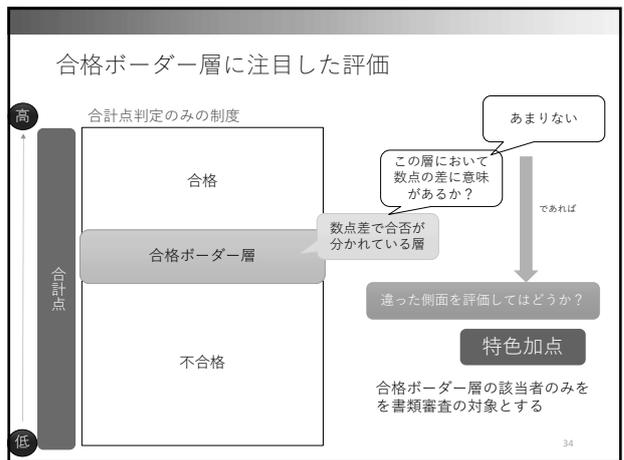
### 特徴加点制度の内容

当初配点 (センター+個別) とは別に加点形式 申請は任意

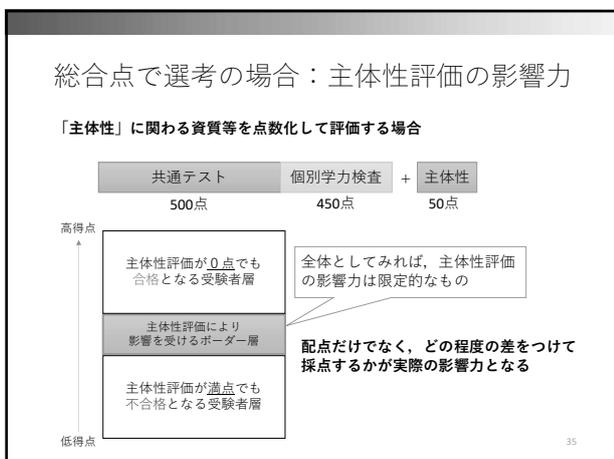
- 活動・実績の名称
- 活動・実績の主催、認定、授与、発行等の機関等の名称
- 活動期間または実績取得年月日
- 活動・実績を証明する資料及び参考資料等の添付
- 活動実績の概要 (規模、参加資格、入賞条件、課題研究の成果など) 【400字以内】
- APや入学後の学習との関連性【400字以内】  
 申請する実績・活動を通して身に付けた能力・スキルや経験などが、  
 大学入学後の学習や活動に、どのように活かせるか を記述する

理工学部				農学部			
(前期日程)		(後期日程)		(前期日程)		(後期日程)	
当初配点	加点	当初配点	加点	当初配点	加点	当初配点	加点
1500	30	1000	30	1000	50	750	50

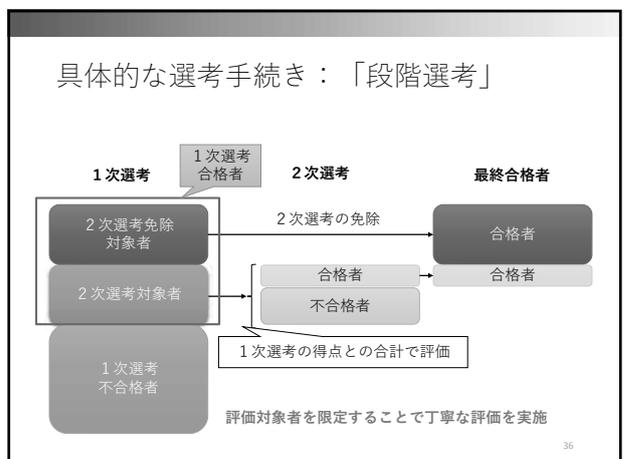
スライド 34



スライド 35



スライド 36



スライド 37

### ポーター評価の考え方 (募集人員100名、最大加点30点の場合)

①任意のポーター設定 (順位に注目)

90名  
20名  
評価対象  
100番目  
加点満点  
加点0点

全員評価とは  
言えない  
全員採点したら  
不合格の受験者が  
合格する可能性

②全員評価を前提 (得点に注目)

530点  
470点  
加点が0点でも合格  
センター+個別  
合格者最低得点  
(例: 500点)  
加点が満点でも不合格

37

スライド 38

### 活動実績の内容と評価の考え方

**志望分野と関連が深い活動・実績**

- 活動実績自体が評価に値する場合 (例: 数学オリンピック入試など) → **活動実績の結果を評価**
- 活動実績は普通レベル場合 (上記のレベルに達しない場合) → **結果よりもプロセスやAPとの整合性を評価**

例) 科学系の課題研究など

**志望分野と関連がない活動・実績**

(部活動で身に付けた能力やスキルとして)

- 練習への取組み: **継続性**
- 練習メニュー考案: **企画力**

例) 体育系の部活動など

アピール → 問題解決型学習 チーム学習 など

考えられるエビデンスの例

- 練習日誌
- 練習メニュー
- メニュー改善による試合結果の改善

エビデンスはなくても評価するが、ある方が説得力は高まることが多い。

38

スライド 39

### 想定される活動・実績

**研究活動**

- 探究型学習・課題研究
- 各種教育プログラム など

**課外活動**

- 部活動
- 生徒会活動 など

**社会活動**

- ボランティア
- 地域活動プログラム など

**その他活動**

- 資格・検定取得
- コンテスト等実績
- 海外留学経験
- その他主体的活動 など

**評価観点**

- 専門分野に対する強い興味・関心及び主体的に学び続けようとする意欲と態度
- 自ら学びを深めようとする行動や姿勢を通して、本学部の教育・研究活動を活性化できる可能性

39

スライド 40

### 自分の進路を見つめ直す機会として

これまでの自分を振り返る機会

様々な活動や実績

申請する実績・活動を通して身に付けた能力や経験が、うちの大学入学後の学習や活動に、どのように活かせるかを書いてね。(例: 特色加点【佐賀大】)

何が活かせるのかをアピール

選抜的目的よりも進路を見つめ直す機会と位置付ける

将来

高校までの自分

大学で求められていること

アドミッションポリシー

40

スライド 41

### 志願者本人に書かせることについて

【文科省の方針】 (一般入試)  
主体性等評価のため、調査書や志願者本人が記載する資料等の積極的活用を促す

受験生本人に活動実績や志望理由などを書かせるのは受験生にとって負担になり志願者が減るんだと思うんだけど・・・

その代替措置として考えられるのは?

調査書

調査書を直接評価しても大丈夫ですか?

41

スライド 42

### 調査書の様式変更

42

スライド 43

### 調査書の評価のについて

たとえば、主体性等評価として調査書評価により加点する場合

調査書の点数が悪くて落ちてる **成績開示**

本人以外が書いた情報によって合否が決定する。  
⇒ 納得性の問題として十分に考慮すべき点

**【調査書改訂】** 調査書作成枚数の量的緩和

先生、私の調査書、何枚書いてくれました？  
この活動について書いてくれていますよね？

高校の先生方の責任が飛躍的に増すとともに、過重な負担となる

佐賀大学は、特色加点評価の補助的な位置づけで調査書を活用

スライド 44

### 効率的な評価環境の構築は欠かせない

**J-Bridge System(JBS) と命名**

**評価支援システムの構築**

- 申請内容の管理
- 根拠資料の管理
- ルーブリック設定
- 判定ルールの設定
- など

受験生 → 大学が求める入力項目 (志望理由、高校時代の活動・実績、学習計画書) → Web出願 → 他機関のポートフォリオ等 → 根拠資料等で活用 → 評価者1, 2, 3 → 評価結果の承認・協議 → 評価結果 → 合否判定資料へ

- 評価準備 (事務作業) の効率化・短期化
- 評価者にとっての効率的な資料の整理
  - ・ 選考資料の効果的な画面表示
  - ・ 資料や評価結果の検索や抽出、並び替え
- 受験生の提出素材 (エビデンス) の広がり
  - ・ 紙から様々なメディア活用へ

スライド 45

### 学びの履歴やプロセスを蓄積

情報の蓄積

e-Portfolioは1つの形

蓄積されるもの: 報告書・発表資料、分析結果やデータ、動画、写真、記事や報道記録、賞状、成果の記録、様々な文書・資料

高校の先生や専門家からのアドバイスや評価

スライド 46

### 各高校において、e-Portfolioにデータを蓄積しているだけでは、大学入試では評価できない

蓄積された膨大な資料 → 提出 → 大学

そのままの状態では評価は困難です。

評価に適したものにすることが必要

スライド 47

### 例えば、ショーケースでの整理 (イメージ)

私の学習成果

私は、佐賀大学が実施する「科学へのとびら」の参加を通して、「重力波と〇〇に関する研究」をテーマに課題研究に取り組んできました。このテーマで研究を進める際に、〇〇の条件がうまくいかず、〇〇のような課題に直面しましたが、佐賀大学理工学部の〇〇先生から「△△△△△△△△」というアドバイスを頂き、〇〇の条件とは異なる観点からアプローチしたところ、〇〇がうまくできるようになりました。この取り組みを通して学んだことは、〇〇〇〇という課題を見つけるには、〇〇〇が必要であり、それを実施するためには、〇〇〇と〇〇〇を勉強しておかなければいけないことに気づきました。

成果物	成果物の説明
	「科学へのとびら」の最終回にまとめたポートフォリオと、修了証および受講証明書です。
	課題研究の実験ノートと〇〇大会でポスター発表したときの資料です。
	理工学部の〇〇先生から頂いたアドバイスを参考にして行った実験の様子です。私は、〇〇を担当しています。

スライド 48

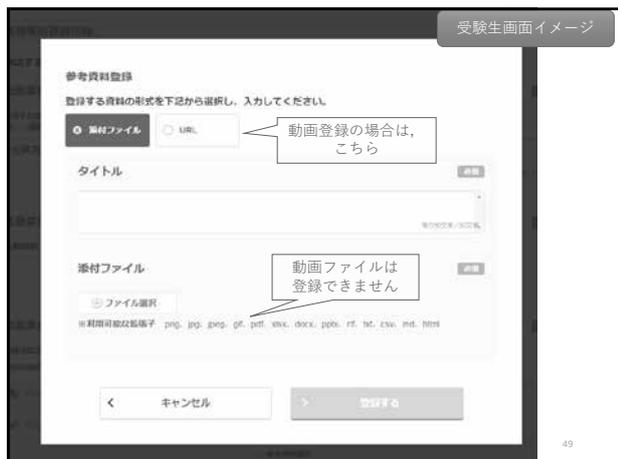
### 受験生画面イメージ

活動内容タイトル (50字以内)

活動実施基礎情報 (50字以内)

活動実績を説明する詳細および参考資料等 (根拠資料等の登録)

スライド 49



スライド 50



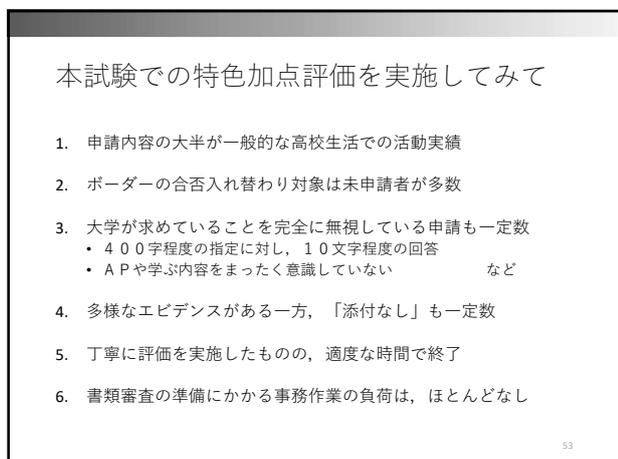
スライド 51



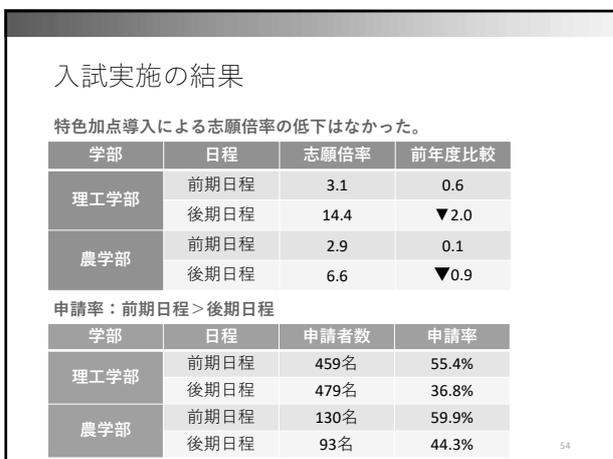
スライド 52



スライド 53



スライド 54



スライド 55

### 特色加点申請者の特徴 (新入生アンケート分析より)

- アドミッション・ポリシーに対する理解  
申請者 > 未申請者
- 志望分野で学べることの満足度  
申請者 > 未申請者
- 入学後に学ぶことに対する理解  
申請者 ≒ 未申請者
- これまでの行動や考え方の特性 (自律性, 他律性, 自制心, 自己主張, リーダー性)  
自律性: 申請者 > 未申請者  
リーダー性: 申請者 > 未申請者

☆辞退率<全体> 申請者 (8.3%) < 未申請者 (15.4%)

スライド 56

### 成績開示について

- 学力検査の得点は公表
- 得点合計は学力検査のみ

免	2次選考免除 (評価なし)
A	A【評価対象者】標準を高く上回る評価
B	B【評価対象者】標準をやや上回る評価
C	C【評価対象者】標準的な評価
D	D【評価対象者】未申請または標準を下回る評価
-	1次選考不適格 (評価なし)

スライド 57

## 高校現場に期待すること

スライド 58

### 主体性をどのように育むか？

生徒たちの主体性を育ててあげなければならない。

主体性 → 高

それが簡単にできれば苦労しないよ。

どのようなアプローチが考えられるのか？

スライド 59

### 主体性を育むためのアプローチ

【考えられるアプローチ (例)】

- 主体性がなぜ大事であるかを説明する。
- 興味・関心の喚起により, 主体的な学習につなげる。
- 主体性を発揮せざるを得ない環境をつくる。
- 主体性が芽生えるのを待つ。

→ 様々な取り組みやノウハウが蓄積されている  
→ ただし, すべてに効果的なものがあるわけではない

高校教育での主体性育成をどのように考えるべきか？

スライド 60

### 主体性を育むべきターゲットの明確化

高

主体性レベル

低

「主体性の育成」  
↓  
受け身からの脱却

どれだけの生徒を脱却させられるかが重要

注目!

- すでに主体的である生徒
- 過度な支援は, 逆に主体性を損なう可能性あり
- 主体性を発揮できる機会や経験の提供が必要

- すべて指示待ち
- 自ら考えようとしな, 考えていない
- 具体的な行動に, なかなか繋がらない
- 「できない」「ムリ」という回答が多い

意外と大きい集団

スライド 61

### 受け身からの脱却に向けたアプローチ

● 生徒たちに受け身であるという自己認識はあるか？  
● 受け身からの脱却後の具体的なイメージがあるか？

直接的な指導より、「きっかけ」の提供が現実的？

スライド 62

### 主体的な学びとして期待される教育活動

重要なキーワード：**探究** 「探究」と名のつく科目が追加や新設代表的なものは、「理数探究」

総合的な学習の時間  
↓  
総合的な探究の時間

「与えられた問い」  
↓  
「自ら問いを立てる」  
ことが探究活動

探究における生徒の学習の姿

スライド 63

### 質の高い探究に向けて

#### 探究過程の高度化

- ① 探究において目的と解決の方法に矛盾がない（整合性）
- ② 探究において適切に資質・能力を活用している（効果性）
- ③ 焦点化し、深く掘り下げて探究している（鋭角性）
- ④ 幅広い可能性を視野に入れながら探究している（広角性）

#### 探究が自律的であること

1. 自分にとって関りが深い課題になる（自己課題）
2. 探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）
3. 得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）

「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」より抜粋  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407196\\_21.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407196_21.pdf)

スライド 64

### 探究過程を高度化するための具体例

人の意見と自分の意見を明確に区別すること

スライド 65

### 自らの考えや行動を可視化すること

自分の考えや行動について、**構造的**にとらえる習慣の定着

【重要な点】可視化・言語化できないものは改善しにくい  
・ 上記のプロセスを言語化する

大学入試のためのポートフォリオであるならばしないほうがよい

結果  
↓  
振り返り

協同学習 + 形成的評価 (評価と指導の一体化)

スライド 66



